

令和 5 年 6 月 20 日現在

機関番号：32636

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K02899

研究課題名(和文)言語・文化の内容とクリティカル・シンキング - 目標と連動したタスクの可能性

研究課題名(英文)Objective-driven task development for critical thinking and L2 cultural learning

研究代表者

大野 秀樹 (Hideki, Ohno)

大東文化大学・経済学部・准教授

研究者番号：40343628

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、第二言語としての英語教育において、Critical Thinking(以後、CT)を育成すべく、タスクを開発した。そのために、CTスキルのディスクリプタの精選、それに基づくタスクの作成・評価・実施・検証をおこなった。すべてのタスクは問題解決を伴う詳細な設問を含み、それに各学習者(複数でのやり取りも含む)が返答する(書く、話すなど)。タスクが扱う内容は一般的なものと文化に関するものである。第三者によるタスク評価の後、タスクを大学の授業において実践し、それに基づきタスクを再修正した。この過程を通して、複合タスクの作成、マニュアル(採点基準・回答の過程・回答例の記載)の強化につながった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本の大学英語教育におけるCTタスクのリソースが蓄積されたことに加え、本研究には以下のような意義がある。まずは、達成目標に応じてタスクを選択が可能であり、専門的な内容の知識をあまり必要としないことである。次に、対象人数と言語の四技能が定められており、単一型タスクをつなぎ合わせた複合型タスクもあること、そして各タスクの所要時間がわかるため、活動の幅が広がることである。また、他の教育場面においても有用である可能性が示唆されている。最後に、マニュアルにディスクリプタとタスクの理論的根拠、タスクの採点基準、回答の過程、回答例が詳細に記載されているため、理論・実践の両面において有用なことである。

研究成果の概要(英文)：In this project, we addressed the significance of developing critical thinking (CT) tasks designed to foster CT skills in L2 settings. CT task development entails the selection of skill descriptors, task creation, task evaluation, task administration, and task validation. Based on a frameworks of CT skills, CT tasks were created. The task creation mandated clearly stating prompts in problem-solving scenes. These tasks deal with general or cultural issues, and require learners to use one or more of the four language skills. The tasks were modified after they were examined by professionals to see if they are fully based on the CT descriptors. The created and modified tasks were administered to over one hundred students at the tertiary level in Japan. Some tasks were combined to produce large-scale tasks. In addition to the tasks, a detailed manual and sample answers were created. These tasks will be used for formative assessment of CT skills and can substitute for CT tests.

研究分野：応用言語学

キーワード：task critical thinking

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

第二言語/外国語としての英語教育においては、CTのタスクに関する研究がほとんどみられなかった。関連の実践・研究においても、目標やディスクリプタがCTタスクに反映しているかが不明であった。そのような背景から、本研究ではCTの育成を日本の大学英語教育において促進すべく、主にCTスキルを育成するタスク開発、その補助となるマニュアル作成の意義が提起された。

2. 研究の目的

上のような背景から、CTに関するタスクを作成し、その意義・有用性を普及することが本研究の目的である。まず、同様の目的で作成されたCTのディスクリプタを複数の枠組みから抽出・修正し、リストの理論的根拠をさらに高める。ディスクリプタとタスクの関連を強めることで、それぞれの意義を高め、修正ディスクリプタと強く関連したタスクを開発する。

タスクが扱う内容は一般的なもの、または文化に関するものである。また、ほとんどのタスクが問題解決を伴うもので、その設問は詳細なものにする。学習者は、タスクに取り組むことで、CTスキルの使用が促される。タスクの背景や回答例をマニュアルに詳しく記載することで、タスク実践の意義をより深める。そして、実践を増やすことでタスク型テストの開発も将来的な研究視点に入れる。

3. 研究の方法

CTスキルの枠組みに準じた先行研究のディスクリプタを吟味、修正し、それに基づいたタスクを作成する。作成の際には、CTスキルの枠組みの土台になった認知科学の研究を参考にし、タスクにディスクリプタが組み込まれているかを重視する。タスク作成後は、ディスクリプタとタスクの関連性に関する客観的吟味(第三者)の段階を経る。その後、主に大学の英語関連の授業においてタスクを実践する。これにより、タスクが使用に耐えうるかを検討する。

マニュアルには、採点基準、回答の過程、回答例を記載する。回答の過程は、主に先行研究などからまとめる。採点基準と回答例には、適切と判断された例に加え、授業における実践において得られた知見を基に修正されたものが含まれる。

4. 研究成果

前述の方法に沿った実施内容と研究成果を記載したい。まず、先行研究のCTスキルの枠組みに準じたディスクリプタの吟味・修正の段階で、約20のCTスキルに関するディスクリプタが抽出された。次に、タスクの作成においては、CTスキルの枠組みの土台になった認知科学の研究を参考にした。その際、タスクにディスクリプタが十分に組み込まれているかどうかの観点を重視した。そして、タスクの吟味においては、上述のディスクリプタとタスクの関連性を数名の第三者から客観的に吟味していただいた。タスク実施の段階においては、まず上記のタスクの客観的分析において不適切とされたタスクは除外された。残ったタスクの一部を大学の授業(外国語としての英語)において実践し、タスクの微修正をおこなった。これにより、各タスクが一般的な使用に耐えうるかを試した。

上の観点に基づき、まずは作成した一部のタスク(現状では、100近くのタスクが残っている)において、実施困難なものがあつた場合、それらのタスクの内部基準を変更し、該当のディスクリプタも修正した。現在のタスクの要素は以下のとおりである。

内容に関する知識

一般的な内容と文化に関する内容が扱われている。後者においても特定の知識をそれほど必要としない。しかし、一部のタスクにおいては、(特定分野の)知識・前提がタスクに正と負の影響を与えることが判明した。前者は一般的にこの分野で述べられていることではある。負の影響として、既存知識を基にタスクの設問に関連性のないことを述べてしまうケースがみられた。

対象人数と四技能

各個人で実施するタスクが大半を占める。1名で実施する場合、すべてがライティング、もしくはリーディング・ライティングとなっている。

設問自体が詳細なタスクがほとんどであるが、特に長い設問の場合はリーディングに関するタスクとみなされた。そのような設問に書いて返答する場合、リーディングとライティングのCTタスクとなる。2名以上を必要とするタスクにおいては、三つ以上の技能を使用する割合が増えた。

所要時間

タスクは多肢選択式ではないこともあり、ある程度の時間が必要である。タイプとしては、10分から45分、それ以上のもの(複合型のリサーチを含む)があり、多くは20分程度のものである。複合型のタスクには複数の週にわたり実施するものが含まれる。

拡張性

作成された単一のタスクを組み合わせることで、複合型タスクを作成した。このタイプのタスクは、グループを対象としたものや、ある程度の時間をかけて実施するタスクに適している。前述の「内容に関する知識」に関連する(特定分野の)知識が、リサーチ活動により得られる場合は、複合型タスクになり、さらにCTの態度に関する領域になる。本研究におけるタスクはCTのスキルに関するものであるが、このように、複合型タスクを通してCTの態度の一部を取り入れることが可能になった。

汎用性

英語科目とは関連のない大学の授業(スタディ・スキルに関する講義など)においても、一部のタスクを実施し、実施の容易性などにおいて可能性がみられた。今後は、設問、内容、および活動内容自体を変えることで、第二言語/外国語としての英語教育のみではなく、より広範囲にタスクの一部を活用できる可能性がある。

その他

テスト併用タスクは、外部テストとの整合性の関係から開発に至らなかったが、タスク間の相関性を調べることにより、いくつかのタスクの位置づけはある程度明確になった。そこからテスト併用タスクの開発につなげていく予定である。また、タスクの実践範囲が限定されているため、実施範囲を広めていく必要がある。一部のタスクにおいては条件が同じでないもの(辞書の使用許可など)があり、それに関する改善が必要である。

マニュアル

マニュアルには、ディスクリプタとタスクの理論的根拠、タスクの採点基準、回答の過程、回答例を記載している。回答の過程は、主に先行研究(認知バイアスの研究など)からまとめたもので、より規範的なものとみなすことができる。一方で、採点基準と回答例は、最初に適切と判断された例を、授業における実践において得られた知見を基に修正している。タスクの実践例が増えることで、採点基準と回答例は修正されることになる。今後は、さらなる実践の結果を加味し、より規範的な回答の過程と照らしあわせることで、回答例をより充実させることが可能となる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Hideki Ohno	4. 巻 58
2. 論文標題 Development of EFL critical thinking tasks	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Bulletin of Daito Bunka University	6. 最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 1件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Reena Cheruvalath
2. 発表標題 Meta-moral cognition and critical thinking
3. 学会等名 JACET Critical Thinking Meeting（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Hideki Ohno
2. 発表標題 Creating tasks for the development of critical thinking skills: Through the content of intercultural learning
3. 学会等名 2019 International Conference on Task-Based Language Teaching（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大野秀樹
2. 発表標題 CTタスク・プロジェクト
3. 学会等名 JACET Critical Thinking Meeting
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担 者	Sheppard Chris (Sheppard Chris) (60350386)	早稲田大学・理工学術院・教授 (32689)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------